様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３３８０４
研究種目：基盤研究(C)（特設分野研究）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８ＫＴ００８４

研究課題名（和文）看取り家族が語るライフヒストリー再構成化への効果的支援方法の開発

研究課題名（英文）Development of Effective Support Methods for Life History Reconstruction as Told by End-of-Life Families

研究代表者
山村　江美子（YAMAMURA, Emiko）

聖隷クリストファー大学・看護学部・教授

研究者番号：９０３４０１１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：在宅において看取りを行う家族の語りに対して、訪問看護師が傾聴するという経験知に基づく看護実践に対する認識について質的記述的に分析を行った。研究協力者は、訪問看護を5年以上経験した訪問看護師11名である。分析の結果、訪問看護師が実践する傾聴に対する認識として、以下の3つが明らかとなった。①あえて知ろうという能動的な姿勢、②ターミナル期以前より会話を通して家族の思いを蓄積、③看護実践の前提となる根拠を探る、であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
訪問看護師の傾聴に対する認識は、家族の語りを妨げることなく、静かに聴くという受動的な姿勢にとどまることなく、あえて知ろうという、積極的な姿勢が示されていた。看取り期以前より、積極的に家族の過去の語りを聴くことが、療養者・家族が望む最期を迎える支援につながるという認識であり、意識して情報として蓄積していることが明らかとなった。
訪問看護師には、過去からの連続性の中で、介護を行っている家族という対象を理解しようとしており、家族の語りを傾聴するという行為において、会話の中から過去から連続性の中で対象を理解することに努め、看護実践の前提となる根拠を探るという姿勢があった。

研究成果の概要（英文）：We conducted a qualitative descriptive analysis of perceptions of nursing practice based on the experiential knowledge that home health care nurses listen to the narratives of family members who are end-of-life caregivers at home. The study participants were 11 home health care nurses with at least five years of experience in home health care nursing.
The results of the analysis revealed the following three perceptions of listening as practiced by home care nurses. (1) an active attitude of daring to know, (2) accumulating the family's thoughts and feelings through conversations prior to the terminal stage, and (3) searching for evidence as a premise for nursing practice.

研究分野：看護学

キーワード：家族の語り　訪問看護師　傾聴　在宅　看取り

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
（１）家族が自宅での看取りによる死別を前にして、家族の歴史を語るという現象の反復性
　看取りの過程を共にする家族と訪問看護師との関係性のなかで、家族が家族の歴史を語るという現象が繰り返し表出されている。なぜ家族は死別を前にして、家族の歴史を語るのかは解明されていない。自宅での家族による看取りの過程という極めて限られた時間的経過の中において、訪問宅は多様であるが、同様の現象が繰り返し表出されている。

（２）看護師が行う傾聴という暗黙知を言語化して説明する試みの必要性
　看護は実践の科学と言われている。看護実践は、マニュアル化された根拠ある看護技術に加え、経験によって獲得された技術も多く、言語化によって説明されにくい暗黙知とされている。
看護師が対象者と対話する際に発揮する技術としての傾聴は、まさしく暗黙知であるといえる。長年のエキスパートとしての経験によって培った技術である言語化によって説明しにくいがために、技術の継承もされにくい状況にある。

（３）看取りを行う家族の歴史の語りの内容
　山村ら（2013-2016）の研究において、看取りを行う家族は、定期的に自宅を訪れる訪問看護師と対面する関係性において、①家族が時間経過とともに発病という現実と対峙し、②社会と関わりながら生きてきたことへの意味づけと、③過去からの家族の関係性を振り返りつつ、これから他界する療養者との変わらぬ家族としての関係性を記憶に留めることを、訪問看護師を対象に語りを通して行っていることが示唆された。

（４）看護師の傾聴という看護実践の本質とは何であるのか
　自宅で看取りを行う過程において家族は、看護師の傾聴という関りによって、看護師に向けて家族の歴史を語っている。語りを聴くという傾聴の本質は何であるのか、それを明らかにすることによって、語りを行う話し手と聞き手という関係性から、語りにおける対象との共在的関係性への研究の発展的可能性。

２．研究の目的
　在宅において看取りを行う家族の語りに対して、訪問看護師が傾聴するという経験知に基づく看護実践に対する認識を明らかにすることである。

３．研究の方法
（１）研究デザイン
　本研究は、質的記述的研究デザインである。訪問看護師が傾聴するという、経験に基づいて実施している看護実践を、どのように捉え実施しているのかを明らかにするために、質的記述的研究を選択した。

（２）研究協力者
　研究協力者は、訪問看護ステーションに勤務する訪問看護師である。以下の条件をすべて満たした者とした。①訪問看護師経験 5 年以上である。②自宅で看取りを行う家族の語りを聴くという経験のある者。③自宅で看取りを行う家族の語りへの対応を実践した経験のある者。④研究参加の同意が得られた者である。

（３）研究協力者へのアクセス
　A 県における訪問看護ステーションに研究協力候補者である訪問看護師の紹介を依頼した。研究者から、説明を聞くことに同意が得られた研究協力候補者に、文書と口頭で研究の趣旨と倫理的配慮について説明を行った。同意が得られた訪問看護師を、研究協力者とした。

（４）データ収集方法
　インタビューガイドに基づき、半構成的面接法を実施した。

（５）分析方法
　質的研究方法の 1 つである、質的記述的分析方法によって分析を行った。

（６）分析プロセス
　研究協力者の同意を得て、インタビュー内容を正確に把握するために録音を行い、逐語録を作成した。逐語録から、研究協力者が傾聴をどのような行為として捉えているのか、どのようにして傾聴を行っているのかを説明している部分を抽出し、ナンバーを付記してデータとした。データの類似部分、異なる部分に注意しながらコード化し、カテゴリー化を行い、概念を抽出した。

（７）倫理的配慮
本研究の実施については、研究者が所属する倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号18057）。研究代表者、および分担研究者における利益相反はない。

①自由意思の尊重と研究協力撤回の自由
本研究は、研究協力者と研究協力施設の自由意思を尊重して行った。研究協力者が研究への協力を同意した後であっても、協力の撤回や辞退が行えることを保障した。研究協力への撤回や辞退によっても、研究協力施設、研究協力者には何ら不利益は生じないことを保障した。

②対象のプライバシーの保護
本研究において知り得た研究協力者の情報、看取り家族、故人についての個人情報について保護を行った。インタビューの内容を逐語録とするにあたって、個人・施設が特定できる内容は削除を行い、匿名性の保持を行った。本研究で知り得た情報は、研究目的以外では利用しないという目的を定めている。

③研究協力に伴う心身負担・不利益・危険性への配慮
研究協力者が、看取りに至る過程にある家族と関わり、傾聴を行ったことを回想することは、研究協力者に精神的動揺が出現することが考えられた。その場合は、インタビューを中止して対応を行うこととした。研究協力への途中辞退が可能であることも説明し保障した。
経験値を言語化することを研究協力者に依頼するため、これにより言語化の困難感や不快感が生じることが考えられた。研究者は、研究協力者の発言を尊重する姿勢をもち、不快・不自由感を抱くことのない公正な態度によって接することとした。

④研究結果の公表
収集したデータは、研究以外の目的では使用しないという利用の目的を定めて実施した。研究結果を公表する場合は、故人も含めた家族、研究協力者、関連施設が特定できない処理を行い、匿名性を確保して行った。

４．研究成果
（１）研究協力者の概要

年齢		人数
30～39		1
40～49		3
50～59		4
60～69		3

経験年数	訪問看護師歴	看護師歴合計
5～14	4	1
15～24	7	5
25～34		4
35～44		1
平均年数	15	24

研究協力者は、訪問看護師 11 名であった。
研究協力者の年齢は、30 歳代 1 名、40 歳代 3 名、50 歳代 4 名、60 歳代 3 名であった。
訪問看護師の経験年数は、5 年から 14 年が 4 名、15 年から 24 年が 7 名であった。訪問看護師の経験年数の平均は、15 年であった。訪問看護師の経験年数を含む看護師経験年数は、5 年から 14 年が 1 名、15 年から 24 年が 5 名、25 年から 34 年が 4 名、35 年から 44 年が 1 名であった。

（２）訪問看護師が捉えた傾聴という看護実践に対する認識
以下の 3 つの認識が、明らかとなった。

①【あえて知ろうという能動的な姿勢】
訪問看護師の傾聴に対する認識は、家族の語りを妨げることなく、静かに聴くという受動的な姿勢にとどまることなく、あえて知ろうという、積極的な姿勢が示されていた。これは、看取り期を療養者・家族・訪問看護師が共にするという状況の中で、この家族を知りたい、どのような人生を過ごしてきたのであろうか、訪問看護師としてこの家族の人生に関わり、知りたいという動機からであった。そして、訪問看護師は、看取り家族から話を聞くことに意味を見いだすという認識でもあった。具体的には、療養者本人の病状が安定していない時には、優先すべき医療的ケアがあり、病状が安定しケアを行いながらほっとした気分である時に、家族が語れる状況を創り出していた。医療職に対して家族が語るという状況ではなく、あえて普通に話しが出きる対象になりきるという認識であった。

②【ターミナル期以前より会話を通して家族の思いを蓄積】
看取り期という限られた期間以前より、積極的に家族の過去の語りを聴くことが、療養者・

家族が望む最期を迎える支援につながるという認識であった。
　訪問看護師が家族の語りを聴くことは、療養者や家族が人生の最終段階において意思決定を行う際に、なんらかの困難が生じた場合であっても、必要な支援につなげるために、訪問看護師は、家族の語りを情報として積極的に自身の記憶として蓄積しているという認識が明らかとなった。
　最終的な看取り期の家族の意思決定場面において、よりよく家族が意思決定できるように、家族がどのような考えであったのかということに対しては、効果的な支援につなげられるように、家族の語りの内容を、情報として蓄積していたことが明らかとなった。

③【看護実践の前提となる根拠を探る】
　訪問看護師には、過去からの連続性の中で、介護を行っている家族という対象を、家族の語りから理解しようとする認識であった。訪問看護師は、家族の語りを聴く努力を行い、気になるところは納得するまで会話を深めるという姿勢であった。訪問看護師は、家族の人生の選択を言語化することに関わり、対象を過去から現在へとつながる連続性の中で理解したうえで、看護実践として関わるという認識であった。
　ターミナル期に、家族の歴史の再構成化に訪問看護師が関わることは、語りは人生の肯定につながると捉えており、あえて人生の選択を言語化することに関わっていた。人生の選択とは、家族を自宅で看とることを決心し、看取り介護を行っているという過程も含めた選択であった。
　家族の語りを傾聴するという行為において、訪問看護師は聴くという姿勢にとどまることなく、会話の中から過去から連続性の中で対象を理解することに努め、看護実践の前提となる根拠を探るという姿勢があった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山村江美子
２．発表標題 訪問看護師が実践する看取り家族の語りに対する傾聴
３．学会等名 日本質的心理学会　第19回大会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	長澤　久美子 (NAGASAWA Kumiko) (80516740)	常葉大学・健康科学部・教授 (33801)	
研究分担者	福田　俊子 (FUKUDA Toshiko) (20257059)	聖隷クリストファー大学・社会福祉学部・教授 (33804)	
研究分担者	蒔田　寛子 (MAKITA Hiroko) (10550254)	豊橋創造大学・保健医療学部・教授 (33930)	
研究分担者	仲村　秀子 (NAKAMURA Hideko) (40319158)	聖隷クリストファー大学・看護学部・教授 (33804)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松元　由香 (MATSUMOTO Yuka) (40586088)	聖隷クリストファー大学・看護学部・助教 (33804)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関